

もくじ

題 名	投稿者イニシャル	ページ
地獄	T. T	1
原爆被爆	T. T	3
戦火の中の青春	A. K	4
満州からの引揚げ記	E. S	5
お国のための戦争だから	K. T	6
戦争のみじめさ	T. O	7
戦争の思い出	M. Y	8
防空壕の中で	K. F	9
一太郎ヤーイ	H. K	10
父	T. T	12
高松大空襲	匿名	13
学徒動員	E. A	14
戦争を身近に感じて	Y. K	15
恐かった過去	Y. T	17
わたしの戦争体験から	K. T	18
幼児の手を引いて	I. O	19
母から私へ そして・・・	T. T	21
小さな思い出	S. H	22
台湾からの引揚げ記	K. S	24
学徒動員の朝に	N. T	26
二度と戦争のないように	E. G	28
食糧難の中で	K. T	29
尊い生命を奪う戦争について思うこと	Y. T	30
ヒロシマを訪れて	M. W	31
戦時下に芽生えた“心”	K. M	32
飽食の時代に生きて飢餓を思う	K. T	34
空襲	T. K	35
幼き日を思う	K. O	36
母の戦争体験談より	K. G	38
母の痛みを	Y. M	39
母の戦争体験記より	M. Y	40

地 獄

T. T

当時、私が11歳。広島県呉市在住の小学5年生の昭和20年6月28日、午後10時頃、母にゆりおこされました。空襲警報のサイレンが、けたたましく鳴り響き、外ではあわただしい人々の動き、枕元の服を着て貴重品の入ったリュックサックを背負い夏ボタン1枚を持って、私は1人、町内で決められている横穴式防空壕、約3キロの道のりを逃げていきました。

父は17年6月、ミッドウェーの海戦で戦死、母と叔母と私の女ばかりの3人家族、母と叔母は戦火から家を守るという名目で、町内の防空壕に避難、老人、子供は山手にある横穴式防空壕へと決められていたのです。私は夏ボタンをかかえ、人ひとりいない夜道をこわいと思うひまなんかありません。ただ一目散に防空壕めざして走りました。途中、照明弾が落され、昼のようにあたりが明るくなりました。私は、思わず空家に飛びこみ息をのんでじっとしていました。

やっと暗くなったので、再び防空壕へと走りました。その時、後から男の人が1人きて、もう逃げられないから、そこらにある横穴へ逃げこもうと言われましたが、決められていることは守らねばと、その人の言うことも聞かず走りました。(あとでわかったのですが、そこに逃げれば、私はこの世にいません。その横穴にいた人は、全員窒息死していたのです。)

町内の横穴に着き、近所の人々の顔を見た時は本当にホッとしましたが、それもつかの間、すさまじい飛行機の爆音が頭の上を何回も近づき遠ざかりします。小さい子供はこわさのあまり泣くと、「泣き声が外に漏れるとわれわれの居場所が敵にわかり、爆弾を落とされるから子供を泣かすな！」と叱っています。

叱られた母親は子供に乳房をふくませ泣かないようにしていますが、そのお母さんの方が、今にも泣き出しそうな顔をしていて気の毒でした。横穴に熱風が吹き込んできて息苦しくなりました。女の人がバケツに一杯水をくんできて、それにタオルやハンカチをひたして口に当て、やっと息苦しきからのがれました。その水は何の水だと思われませんか？なんと風呂の水だったのです。もうこの時、水道管は破裂し、一滴の水も出なかったのです。でも、汚いとか何とか言ってもらえません。まんじりともせず爆撃が済むのを今か今かと待ちました。東の空が明るくなりだした頃、やっと敵機は去りました。

外を覗きに行った人が、大きな声で「一面焼け野原よ。」と叫びました。私は、別れた母が気がかりでシクシク泣き出すと、おばあさんが「心配ない、心配ない」と励ましてくれましたが、半分は自分自身にも言っていたのでしょ。

母達のいる防空壕では、横穴に逃げた人は全滅と聞き、心配して消防団長さんが様子を見に来られました。

どのくらい時間がたったかしら、叔母が私を迎えに来てくれました。お互い涙を流して無事を喜び合いました。叔母に連れられ母の所へ行く途中、母親が背中に機関銃の弾を無数に受けうつ伏せに倒れており、その下には赤ちゃんが母親の重みで窒息死しているのです。このお母さんは、我が身を犠牲にして子供を助けようとしたのです。

また、全身大やけどを負い、一糸まとわず、髪の毛もちりぢりに焼けて、「水、水」と水ぶくれの赤い手を私達に差し出すのです。

叔母は「あの人に水はあげん方がええ、あげたら死ぬ」と言って、さっさと歩きます。私はうしろをふり返りふり返りながら叔母のあとに続きました。こわさと、水をあげられぬつらさ、今でも目を閉じれば、あの光景がまざまざとよみがえり涙が出ます。母達のいた防空壕の横に川がありましたが、母達もその川の水で、タオルやハンカチをひたし、口に当て息苦しくなるのを防いだそうです。その川の中でも人がたくさん死んでいました。

やっとの思いで高松まで逃れてきましたが、予讃線の汽車がいつ出るかわからないとのこと、母は旅館で泊ると言いましたが、私はどうしても言うことを聞かず、汽車から降りませんでした。やっとなら発車して目的の駅に着き、三人とぼとぼと暗い夜道を親戚をめざしました。その家で一息ついていたら、高松が空襲です。私は、二度も命びろいをしたのです。その夜は、本当に死んだように寝ました。翌日、田んぼの方へ出て行くと、田植えが済み、早苗の葉先がそよそよと風になびいていて、心をなごませてくれました。毎年この季節になると、あの当時を思い出します。

父を、そして家を失い、また、若くしてこの世を去った母も戦争犠牲者の一人だと思います。本当のところは、自分の記憶の中に閉じ込めて、他の人に話す気持ちにはなれません。その悲惨な姿や心境は、実際に経験した者でなくては理解できないことだからです。私が当時のことを話す気持ちになったのは、戦争の狂気を体験した者が「二度と戦争をしてはいけない」という叫びをあげた方がよいと思ったからです。

機会があれば、やはり語り継ぎ、戦争という愚かな行為をやめさせる努力をしなくてはと思います。

1982. 4. 8

原 爆 被 災

T. T

叔母に一人の幼なじみがいます。その人の体験談です。

その人は、広島で原爆にあいました。

手足は、やけどのため水ぶくれができ、やがてそこからウミが出だし、“うじ虫”がわいたそうです。

みなさん、“うじ虫”と聞いただけで、『ああ汚い』と思ったでしょう。でも私は、『つらかったらろう』と涙が出ます。その“うじ虫”をピンセットで一匹、一匹、泣きながら取ったというのです。痛くて泣いたのではないのです。どうしてこんな目にあわなければいけないのかと、情けなくて、情けなくて涙が出たというのです。

この人は、今、岩国市に在住し、真夏でも長袖の服を着て、ケロイドを隠しているそうです。最近、お孫さんが産まれたそうです。一番怖いのは、子供さんや孫への影響だということです。

原爆被災者の写真を、まるで汚いものでも見るようにしている人がありますが、その人は戦争を体験していないからです。・・・・・・・・その人達は幸せです。

1982. 5. 8

戦火の中の青春

A. K

もうすぐ、8月15日、37回目の終戦記念日です。

二度と戦争があってはいけないと、今、盛んに核兵器廃絶の運動が行われております。原爆の恐ろしさを訴える映画も、もっともっと多勢の人達に見てもらい、知ってもらう機会をつくり、戦争の恐ろしさを身近に感じる人が多くならなければいけないと思います。

私は台湾で育ち、終戦を台南で迎え、昭和21年4月、この四国に帰ってまいりました。住んでいた台南のすぐ隣、高雄に軍港があり、航空隊のある基地があり、戦争が烈しくなるにつれ、毎日のように警戒警報や空襲の連続で不安な毎日でした。

昭和20年3月、大空襲により台南市も、とうとう半壊に近い状態になりました。中でも私の勤めていた台南州庁も、ちょうど建物の関係から爆撃の目標になり、惨たんたる状況でした。分室の鉄筋でできた防空壕の中でいた私も、爆風による真白い砂煙と地響きで、身体に大きなショックを受け、あの時の恐ろしさは、今も忘れることはできません。やがて、その分室も翌日の焼夷弾で跡形もなく全壊しました。そして、その日私が勤めから帰ると、心配していた妹や母が私の無事を見て、私に抱きつき泣いて喜んでくれたことが昨日のように思えます。

爆撃がひどくなるにつれて、妹達と母は見知らぬ台湾人の住む田舎へ、父の知人を頼りに、真夜中をよって疎開しました。妹達もさぞかし心細かったことでしょうが、見送って帰り道、私も焼け跡の残り火の中を水道の栓が切れた音を聞きながら、誰も通らない夜道を恐ろしさと悲しさに涙を流しながら一生懸命走って帰ったことを覚えています。

父は在郷軍人、私は勤めがあり、家には気丈な年老いた祖母が疎開も聞き入れずに私達の炊事をして最後まで頑張ってくれました。やがて終戦になり妹達も疎開先から帰り、家族全員が無事もとの生活にもどりましたが、それもつかの間のことで、翌年はいよいよ内地に引き揚げが決まり、うれしさや悲しさの不安な毎日でした。家の家財道具は一切接收され、残るものは何一つなく、家を出る私達を待ち受けたように裏口から現地人が侵入するといった状態で、長年住み慣れた故郷を捨て帰ってまいりました。帰国当時は物に不自由するたびに、夢の中で、何度、あれはあそこに、これはあそこに、と家に取りに帰った夢を見たことでしょう。

今でこそ何不自由なく暮していますが、やはり戦争さえなければ、こんなみじめな青春がなくてすんだものと、つくづくと平和の有難さを思う気持ちで一杯です。

常に私達は、戦争で亡くなられた多くの方、原爆で犠牲になられた方々のご冥福をお祈り申し上げ、二度と戦争のない平和な世界がやってきますよう、努力してゆきたいものです。

1982. 8. 8

満州からの引揚げ記

E. S

昭和 20 年 8 月 9 日、私（当時 11 歳）は学校へ行くと、先生に「早く帰って避難の用意をするように」と言われ、不安な思いをしながら家に帰ると、父と母が荷物を作っていた。

「ソ連の参戦だ。」私が「避難するの？」と言うと、父は、「となりの人が病氣なので、すてて行くことはできない。」と言って、この地に残ることになった、父は猟銃を取り出して手入れをした。何かがあったら父子三人いさぎよく死のうと言った。

私の家と隣の人だけになった。皆、馬車を仕立て避難して行ってしまい、とても悲しい思いでした。それからの私達は、毎日、日の丸をつけない飛行機が飛ぶのをうらめしそうに見つめたものでした。

そして 8 月 15 日敗戦を知りました。

小さな手にシュリュウダンを持たされ、山中で一ヶ月を過ごし、後、現地人の好意で家に帰り、現地人の服を着てソ連兵の目をのがれて暮しました。それから一年、母と私は、あのいまわしい戦争のため父と兄を失い、荒れ果てた満州の広野の中を手を取りあって、故国日本をめざしてひたすら歩いたものです。

「日本に帰れば、日本にさえ帰れば何とかなる。貧しくても生きていける」となぐさめ助けあってきました。だが、そんな思いで帰った日本は、昔の面影など一つもなかったのです。米軍がいっぱいで、とてもおそろしい思いをしたことを覚えています。また、一方では食糧難で、引揚げてきた私達は頼るあてもなく、途方にくれました。家もなく観音寺の駅に着いた時には、286 円しかなかった私達母子が、混乱した戦後をどのように生きてきたかは、皆さんにはわからないかも知れませんが……。

母は朝から晩までよその家の手伝い、私は昼は学校、夜は母と一緒に内職、土曜の昼からと日曜日は、わずかの野菜を荷車に積んで町中へ売りに行きました。

当時私は 12 歳、とてもはずかしく、友達に会えばはずかしく逃げるように家に帰ったものでした。それでも、生きるために一生懸命でした。そして父と兄を奪った戦争を憎み、平和に幸福になる日々をどんなに待ち望んだことか。

そして今、忘れかけた戦争の怖さを思い出させるように、私の所に 37 年前満州（現中国）で取り残された人達を訪ねて来る人がいるのです。私は思う。戦争はまだ終わっていない。今の平和は「擬装だ！」と声を大きくして訴えたい。そして、薄れゆく記憶の中で、帰国途中で死んでいった多くの人達の顔が浮かんで消えてゆく。

1982. 9. 8

お国のための戦争だから

K. T

世間には、今思い出してもゾッとするようなとか、背筋が凍るようなとかの話がよくあるが、私の戦争体験は少しばかりニュアンスが異なるけれども、その類のように思う。

昭和 20 年（当時私は 13 歳）は戦争の末期症状で、この四国の片田舎にも B 29 やグラマン機がしばしばおそってきた。そして今は田畑に姿を変えている母神山の飛行場が格好的になり、度々攻撃されたと聞いている。とにかく近くに飛行場があった関係からか警戒警報や空襲警報のサイレンが昼夜をわかつたず鳴り響いた。その度に私達は防空頭巾を頭から被り、救急袋を肩にかけ一目散に避難した。

当時は避難場所として各家庭に防空壕が掘られていたが、私の家は地下水が噴き出て、いつもびしょびしょに濡れており、とても入れたものではなかった。隣近所も同じ状態でなかったかと思うが、とにかく、私達は軒下を伝って東西南北へと散り散りに逃げた。まるで戦争映画そのままに無言でひた走りに走った。私のめざす避難場所は室本の当免方面で、「あの松林に逃げこめば何とかなるだろうか、今は撃たれませんように！」と心から念じながら三架橋を渡り、もう一息という時に警報解除のサイレンが鳴り、へたへたとしゃがみこんだこともしばしばあった。遙か彼方の上空では B 29 の編隊が悠々と轟音をとどろかせて飛び去っていたが、その様子は今でも脳裏に焼きついている。今思えば、必死に逃げ回っていた私達の様子は上空から手にとるように分かっていたことであっただろうと思うと、何とまあ無知と無駄を繰り返していたことかとヒヤリとしたものを感じる。

B 29 が去った後、誰かが機銃掃射で手のひらをぶち抜かれたとか、お寺の屋根に弾を撃ちこまれたとか、バリバリとすぐ横を機銃掃射されたとかの話を、息をつめながら耳を傾けたことを昨日のように思い出す。このように思い出すと、数珠つなぎに後から後からと嫌な思い出が限りなく出てくるが、中でも今もって悔しくてならないのは、私の家が強制立退きで壊されたことだ。それも運悪く 8 月 15 日終戦日の早朝壊しにかかり、敗戦の声を聞いて一旦作業は中止したが、ほとんど壊していた為に、とうとう全部壊されたことだった。折悪く父親は出征してしまって、女、子供だけの留守家庭ではどうしようもなく、父親の復員の日まで、狭い間借りの生活が続いたものだった。戦争だからとか、お国の為だからという名目で一家が離れ離れになり、貧乏のどん底に突き落とされることは絶対避けるべきであり、また子供達や子孫に至るまで、あのような惨めでどうするすべもない悪夢としか言いようのない体験はさせたくない！・・・としみじみ思う昨今である。

1982. 10. 8

戦争のみじめさ

T. O

戦争といっても、私は幼なかつた為と外地朝鮮にいた為、実際に戦火の中にいたわけではないので実感はわかりませんが、終戦の日から一変して今までの生活から、負けたみじめさは幼い私にもひしひしと伝わってきました。

私達は日本人が経営している旅館へ集合し共同生活をしました。食べるのがやっとで、乳飲み子や病人が死ぬと、冬の間は菰に包んで墓地に置き去りにするだけ。見ていてそれはとても悲しいことでした。また、暖を取るために木や松の皮などを雪の山に取りに、幼い子供も大人にまじって行かねばならないこと、いろいろ苦しいことばかりの中でも、やっと日本に帰る時に歩いたり野宿したり食べ物の準備など、言葉では言い表せない苦しい体験を積んで、やっと米軍キャンプ（仁川）に着き帰国を待ち続けました。

船に乗って来る日も来る日も海ばかり、とても退屈な日々、中には栄養失調で死んでいく人を何人も見るにつけ、身につまされ通しでした。やっと日本の土地が見えると、誰彼となく「万歳！」の声をあげたものです。そして日の丸を揚げ全員ささやかに祝ったものです。佐世保港に着いたのです。私達は父が多度津の人でしたので、そこに落ち着くことになり、のろのろ走る汽車（汽車と言っても貨物の牛や豚などと同じ）に乗りました。多度津駅で服を着替えて、おばの家に行く途中でおばと会いました。父は抱き合って泣いていました。私はなぜ二人が泣いているのか意味がわかりませんでした……。

父が私達を学校に行かせる為に、教科書など毛筆で夜遅くまでかけて本を作ってくれたことなど、あの時の苦しい思い出に向うたびに、戦争は“もうごめんだ”と思い、新たに訴えたい。

1982. 11. 8

戦争の思い出

M. Y

戦争中の思い出というと、幼かったせいか、暗い暗い闇の中での出来事のようにしか思い出せません。

あの頃の生活は、みんな同じだったと思いますが、東京での生活は惨めでした。すべての物が配給制になり、切符によって支給されていました。特に、食べ物に関してはひどく、水のような雑炊をもらうため、手さげがついている蒸し器（持って帰るのにこぼれないよう、深くて蓋付の入れもの）を持って、長い列に加わり、入れてもらうのも杓子で「どぶどぶ……」と、食べ物として扱っていないような扱い方で配給光景でした。まだいただければよいほうで、2、3の人の前で、「今日の配給は終わりました。」という立札を出された時もあり、空っぽの器をもってうらめしく思ったこともありました。また、スプーンを手に、母に連れられて配給があるという食堂に、食事させてくれるというので、長い列に加わったことも思い出します。ひもじさを少しでもしのぐためには、配給があるというところには、遠くても、長蛇の列でも並んだものでした。

空襲警報発令のサイレンはいつ鳴るかわからなく、防空頭巾はいつも肩からさげていたように思います。日、夜問わずサイレンの響きにおびえ、防空壕の中で震えていたことも思い出します。

あれは、昭和18年8月。暑い夏の日だったのに、夏が鮮明に思い浮かばないのです。遠縁のおじさんに連れられて、両親の元を離れて観音寺に疎開してきた時のことが……。ただ東京駅まで見送ってくれた母が宛名「東京都渋谷区代々木……」と書いたはがきの束を手渡して、「何かあったら、これに書いて知らせてね。」と言ったこと……。背負ったリュックサックの中に、人参、玉ねぎのきざみ込まれて焼かれた黒いパンをどこで手に入れたのでしょうか、いくつか。

3日以上はかかったと思う列車の中で、おじさんを見失ってはいけないと、人、人、人の中で身動きもできず、大人の胴のところにうもれるようにしていたこと……。このようにして「疎開してきた子」は、晩になると親恋しさに、また、「もんできたん?」「いっきょんな?」などなど、ことばがわからないつらさに涙を流し、「早く迎えにきてください。」など書いて、はがきを投函したようです。9歳の時だから無理もないでしょう。

昭和20年4月、両親と弟が疎開してきました。すべてを投げ捨てて帰ってきたということを後で聞きました。敗戦の色濃い東京の上空をB29の編隊機が肉眼で2cm位の機体を見せていたのが、2m位の機体を見せて、低空飛行するようになったこと。また、世田谷に砲撃によって墜落したB29を見て地獄絵を見たという。その後、4ヶ月で敗戦になり、両親の胸中を思うと（命があったからこんなぜいたくな思いを打ち明けられるのですが）残念無念だったと思います。

私の体験は、こんな小さなものです。兄弟、親など両親の命を奪われた方には大変お気の毒に思います。絶対に戦争はしてはならないと訴えていきたいと思います。

1982. 12. 8

防空壕の中で

K. F

「ウーウ ウーウ ウーウー」

晩ご飯にすすったお粥がどうにかおなかでおさまりかけた頃に、何度も何度も繰り返して鳴り続けるサイレンの音。(当時お米は配給制で、お粥にしたり、雑炊にして食べていた。)

あー、あ、また空襲警報だ。

母の投げしてくれた防空頭巾をつけて家の壕に入ろうと足をかけた時、「すぐ興昌寺山へ逃げて下さい。おい敵機が本土に入っているぞー。」いつになく鋭い声である。切迫した異様な雰囲気につつまれながら、母と一緒に妹達の手を引いて走る。メガホンを口にした部落の世話人が右往左往しながら早く早くとせき立てる。父は部落へ出て活躍し、家族は母まかせなので、弟を背に妹達と荷物をかかえた母の姿が痛々しい。一番近いところの壕に入った途端「バリ、バリ、バリ」耳をつんざくような音が。壕の中の集団は皆、無言……。息を殺してうずくまる。……と、突然「岡山方面に弾が落ちたぞ。燃えかけた、やられたぞ」いよいよ来たか。

「本土決戦」という言葉が頭をかすめ、不安な気持ちでいっぱいになる。あたりは、だんだん暗くなってきた。……しばらくして気が付くと妹達は、いつのまにか母のズボン、エプロンを、しっかりと握っている。私も思わず手がのびた。敵機はどこを飛んでいるのだろうか、不気味な静けさはしばらく続く。どのくらい時間がたったであろうか……。

じめじめした壕の中で寒さが襲い、空腹が頭をかすめる。雑袋の中にある大豆に手がのびて思わず「ポリ、ポリ」とやりかけた。とっておきの非常食なのに。

「お母ちゃん、姉ちゃんは豆食べよる」妹が訴える。

(私)「ほんでも、おなかすいたのに」言葉にならないで口の中でぶつぶつ言う。

(母)「バカー、音をたてんように噛め」

涙がひとすじ頬をつたった。戦争なんていやだ。

21世紀の子供たちに、命の尊さを教え、核戦争にまきこまれないような強い子供に育てよう、核を許さない子供に。

1983. 2. 8

一太郎ヤーイ

H. K

終戦の年、昭和 20 年、私は 9 歳。豊田村大字新田という片田舎に育った私は、戦争体験を筆にするほど生々しい体験はしていない。それでも、戦争にまつわるいやな思い出は数限りなくある。以下思いつくままにその一部を列記する。

当時、学校では先生や友達との朝と帰りのあいさつは「勝とう。」と言っていた。私の出身校である豊田小学校は、その頃、豊田国民学校と呼ばれ、運動場には防空壕が掘られ、その上は一面芋畑であった。なぜかさつま芋に関する記録が多い。

私達は毎日、鎌や唐鍬を持って登校し、先生といっしょに母神山の木を切り土を耕し、芋や豆を植えたことがある。さした芋のつるが根づくまでは油断ができない。勉強よりも水かけが第一。登校すると友達と 2 人組になり、てんびんで川の水を山まで運び、丁寧に丁寧にかけたものだった。肩からつるした防空頭巾は流れ出る汗と、足を進めるたびにこぼれる水とで、びしょびしょになっていることが多かった。水かけの最中に空襲警報が鳴り、山の雑木の中に隠れたことも何度かあった。

また、今の池之尻町と出作町の境にある赤土池に稲を植えたこともある。校長先生と男の先生が赤い印のついた綱を両方で引っ張り、私達は苗を植えた。どの子の顔も泥だらけ。ほとんどの子が池底のぬかるみに足をとられ、尻もちをつき、腰から下は、ずぶぬれだった。今思えば、なんてばかげたことを！ユニークでおもしろいじゃない！と考えるかも知れないが、当時はそれほどまでに食べる物にも困っていたのである。

学校への弁当は焼き芋やふかし芋がほとんどで、中にはサイダーびんにおかゆを入れて来ている友達もいた。私の家は農家であるが、田んぼばかりで畑がないので、お芋がなかった。母は麦ばかりのようなご飯の中に一握りのお米を一カ所に入れ、それでおにぎりをつくってくれた。不思議とそれは、いつも黒く焼いてあったり、どんぐりや豆の粉をまぶしてあったりして、一見握り飯とは見えなかった。この歳になり母の思いやりがいろいろと考えられ「ありがとうございます。」と、思わず手を合わすことがある。

母親が我が子を思うほど、常識を超えた偉大な愛と平和はないと思う。「一太郎ヤーイ！お国の為に捧げた命じゃ。生きて帰ろうとは思うなよ。わかったら鉄砲をあげえ！」と息子の出征を棧橋で見送った母親の話は有名だ。その気丈な母親も我が家に帰り玄關の敷居をまたぐと、腰の手拭いを引きちぎるように抜き取り、戸をピシヤリとしめ慟哭していた・・・ということを当家の近くで育った母から聞いたことがある。

我が家でも出征して善通寺の駐屯部隊にいた兄から「〇〇へ出る」とだけ記した手紙が届いたことがある。その時の泣きはらした母の目といつまでも神棚に供えられた白い手紙は、今も私の脳裏にこびりついている。また、朝夕には、決まって 1 人分余分にご飯を供え一心に手を合わせていた母の姿も忘れることができない。

その頃、村では男も女も竹やりのけいこに呼び出された。先を鋭くとがらせた青竹で、落下傘で降下上陸して来た敵兵を突き倒す訓練なのである。私は幼心にも本土激戦が近いような恐怖にかられたのを覚えている。

B29 が上空高く飛行雲と不気味なうなりをとどろかせて飛んでいるのを見かけたり、頭上が一瞬暗くなったかと思われるようなグラマン機の編隊を目の当たりにすることもたびたびあった。ある日、編隊を組んで近づいたグラマン機の一機が突然急降下し、耳が不自由なため避難するのが遅れた隣のおじいさんに機銃掃射しているのを目撃したことがある。運よく弾はそれ、おじいさんは難を逃れたが、まったく私達は格好のおもちゃであったように思えてならない。

このように、人間をおもちゃ扱いにされたり、世の中のすべての愛や物品を破壊に導く戦争は二度とは経験したくない。いや、永遠に起こしてならないと思う。私はしみじみと考えることがある。母から生まれ母親になる定めにある女こそ、真の愛と平和を守り、国を動かす無限の力を秘めているのではないかと。一人ひとりが平和国政を維持する信念を持ち、夫を、息子を、兄を、弟を、破壊あって益なき戦争ごときもので命を失わせるようなことがないようにしなければならない。無限の可能性を秘め生きるために生まれてきた子供達のためにも、そうしなければならない義務があると私は叫ぶ。

1983. 3. 8

父

T. T

昭和 17 年 5 月のある朝、早く出勤する主人を見送って玄関を出た。いつもだったら、街角を曲がるまで主人の後姿が見られるのに、今朝に限って、いつ主人が街角を曲がったのかわからなかった。あたりは人一人いないのに、まるで神隠しにでもあったように、ふと主人の姿が私の視界から消えた。不吉な予感がした。それから数日して、日課にしていた氏神さん参りに行く途中、下駄の鼻緒が切れた。ますます不安がつのった。主人にもしもの事があったのではないか。

不安は的中した。10 日余りして、市役所の人が主人の戦死公報の内報を手にして家に来られた。丁重に内報をお受けして帰ってもらった。子供は学校で家には私一人しかない。玄関に鍵をかけ、私は思いっきり泣いた。

「主人の死」のショックと、これからの生活の事などで私は心身共に疲れ、1ヶ月くらいして流産した。6ヶ月で医師から男の子だったと言われた。

・・・・・・・・これは、母から聞いた父との事です。

戦争は戦地で戦う者の命を奪うだけでなく、母体に宿っている小さな命までも奪っていく。戦争はもう二度といやだ。絶対にしてはいけない。いつまでも、今のこの平和が続くよう願わずにはられない。

1983. 4. 8

高松大空襲

匿名

私が飛行機工場に就職した時は、大東亜戦争も中頃でした。ラジオのニュースでよく大本営発表と言って軍艦マーチの流れる中、その日の特別な戦争ニュースが放送されておりました。

私達も毎日軍歌を歌いながら、寮から工場まで5キロの道程を、各中隊ごとに並んで歩きました。物資が不足する中で『欲しがりません、勝つまでは』と言いながら工場で働きました。そのうち、戦況も次第に悪くなり、サイパン島、また硫黄島玉砕の悲しい知らせ。やがて大都市空襲、沖縄艦砲射撃と攻撃され、私達は地元に戻って来ました。そこでも焼夷弾が雨あられの如く落とされ、次々と戦災にあいました。

東の夜空が赤々と不気味な色に。何だろうと皆で見ていると、それは高松大空襲で燃えていると言うのです。夜の明けるのを待ちかね、友達が家族を案じ高松に。三日後に帰って来た友達の話では、一面焼け野原。あちこちでまだくすぶり煙が漂う中、自分の家に着いたら跡形もなく、家族を探し、人の寄りそうな所を必死で回ったそうです。焼焦げて倒れている人、傷ついて血を流している人、一人ひとりの顔を確認しながら。そしてようやく公園の中、ずらりと横たわった人々の中に、負傷して歩けなくなっていた父親を見つけたのです。他の家族はどうとう見つけられなかったそうです。

私は幸いにも家族を戦災で亡くさずに済みましたが、日本が負けアメリカ軍が上陸して来たらどうなるのだろうと、とても不安に思ったことを今でも覚えています。

8月15日、長い戦争は終わりましたが、敗戦後、戦災孤児、衣食住に悩んだ人々、それぞれ大変な苦勞をしました。

今は何不自由なく平和な日本。もう二度と戦争を繰り返してはならない。戦争反対！！

1983. 8. 8

学 徒 動 員

E. A

学徒動員令により、小学校 6 年生は勉強を軍需品製作に切りかえ、工場へ工場へと動員されました。

私達は「勝利の日まで、勝利の日まで」と心の中で歌いつつ大人に混じって、小さい手で部品作りに励みました。慣れない手つきでしたが、一生懸命に努力し、上手に出来るようにと努力したものです。しかし、その頃は戦況は思わしくなく、敵機の来襲も数多く事態はいよいよ切迫してきました。仕事にも慣れ能率も上がってきたある日、警戒警報が出されたのです。(警報が発令されると生徒は帰宅することになっています。)私達は大急ぎで先生と電車に乗りました。「どうか無事に家に帰ることができますように・・・。」と友達と話していると空襲警報が発令されました。さあ大変！！電車は止まってしまいました。各自グループごとに避難するのです。一生懸命に走ってやっと避難場所を見つけて隠れました。走りながら「かあちゃん助けて・・・！」の声も聞こえます。すると急に『バリバリ』と銃声が聞こえてくる。ヒューン、ヒューンと弾が飛ぶ。タッタダダーンと爆弾の炸裂する音。そのたびに小さな体は震えて生きた心地はしなかった・・・。

子供の泣き声や女の人の悲しそうな声、私もじっと辛抱しながら父母のこと、弟や妹達のことを思い浮かべながら目をつむって一生懸命に拝みました。大人もみんな手を合わせて口々に何かを言いながら運を天に任せて一心に祈りました。

1 時間余りで爆音も聞こえず外は静かになったようです。とても長い時間が過ぎたようでした。警報解除のサイレンがなり、みんなは「ああ助かった」と言って無事を喜び合いながら駅に急ぎました。もう戦争はごめんだ！戦争は悲惨です！平和を願います！！

1 9 8 3 . 1 1 . 8

戦争を身近に感じて

Y. K

この町で育ったおかげで、戦災にこそ遭わなかったが、幼かった私にも、いろいろ戦争体験があり、折に触れ、なぜか鮮明にあれこれ思い出されるのである。

それは、終戦も間近な夏のある日のことである。数えてみれば私は13歳、弟は9歳であった。焼けつくような真夏の午後、例によって敵機来襲を告げる“警戒警報”発令のサイレンが鳴り、“空襲警報”が鳴ると、私達姉妹5人はあわてて「防空壕」に飛び込む。みんな汗びっしょりで、早く出たいのをじっと我慢してすわっている。毎日この時間にやってくるB29爆撃機が鈍い音で通り過ぎると、近所のおじさんが“空襲警報解除”を茶色のメガホンを片手に、家の前を通り過ぎていく。私達はおじさんの声を聞けば、わっと外へとび出していく。

弟は、すぐお向いのかずちゃんのうちへ遊びに走った。なぜかその時、弟は手ぬぐいを頭からかぶっていた。たぶん、防空壕で汗をかいたので、母親が拭くように渡したタオルをおどけてほおかぶりのようにしていたのであろう。その時である。急にブーンという大きな音がして、パラパラとたたきつけるように、何かが落ちてきた。弟が驚いてお向いの家に飛び込むのといっしょだった。私は家の中からそれを見ていたのである。私は、ドキッとして道路の向こうの弟を見た。けろっとして、どこもけがもせず立っているではありませんか。私は落ち着いて状況判断をし、撃ったのはグラマンだと思った。弾はお向いの屋根瓦にあたったのであろう。

グラマンは、アメリカの小さな戦闘機で、なぜか翼の先がギザギザになっていたように思う。私は子供心にも、グラマンは意地悪なやつだと思っていた。それは、大人たちが「グラマンは突然急降下してきて、歩いている人を撃ったり、船で魚を獲っている人をめがけて撃つそうなの。」「人が逃げたらもう一度旋回してきて撃ったりする。」「どこかの牛が撃たれたそうなの！」などとうわさしているのを聞くからである。

なぜか私の脳裏に、弟が白い手ぬぐいをかぶってお向いに飛び込む、あの時の様子が焼付いてしまった。この騒ぎで、父母がどうしたのか、お向いの屋根にパラパラと撃ちこまれた機銃掃射の弾はどうなったかなどは、全然覚えていない。とにかく、私は驚きのあまり、弟のことをみんなにしゃべったけれど、その後は、ぴたりと口にしなくなった。人間はやはり、嫌なことは口にしないとされるが、本当だなあと思う。

あれから40年、5人の姉妹（弟は真ん中の3番目）は、皆それなりに年をとったけれど、弟と私とは特に仲が良く、絶えず遊びに行っては、わいわいおしゃべりしている。しかし、その事は不思議と口にしない。したくないのである。当の弟自身、10歳そこそこの経験は今でも覚えているかどうか、問うこともしたくないのはなぜだろうか。

私は、ふと弟と仲が良いのは、ただ気が合うだけでなく、あの時グラマンの音に驚いてお向いの軒下に飛び込んだ、幼気な白いほおかぶりの幼い弟の姿。命びろいした肉親への愛着、ああ助かってよかったと思った時の感動と愛おしさなどが、幼い姉である私の頭に焼付いているからだと思うのである。

毎日続く苦しい勤労奉仕、育ち盛りの私にとって、食糧難も残酷であった。それから

何よりつらかった敗戦の日、たとえお日さんが西から出ても、日本は敗けない、日本は神の国だもの、必ず勝つと信じていた。ひたむきな幼心が打ちひしがれたあの時の苦しきなど、戦争の思い出はたくさんあるが、やっぱり、ふと私の頭をよぎるのは、悪夢のようなグラマンの急降下である。小さい弟を撃とうとしたグラマンなのである。

そして、私がだんだん成長し、まわりのこともわかる年頃になると、肉親を戦争の犠牲にした家族の深い悲しみが痛いほどわかるのである。

1941年12月8日は、太平洋戦争勃発の日です。私達は、二度と戦争へのおろかな道は進みません。

1983. 12. 8

恐かった過去

Y. T

はっきりとした記憶はないが、母から聞いた話や私がおぼろげに覚えている中から・・・

B29 が群をなして東から西へ、爆音をたてて低く飛んでいたこと、木之郷の飛行場に爆弾が落とされて燃えていたこと。警戒警報が発令されると、自分のうちの防空壕の内へ逃げ込んだこと、また、夜寝ている時サイレンが鳴り出すと、窓に黒い紙を貼り合わせて作った紙のカーテンをおろし、はだか電球に覆いをして、外に明りがもれないようにしたことなど、いろいろ子供心に恐ろしかったことが思い出されます。

学校へ行っても運動場一面にさつま芋を作り、その下は防空壕になっており、絶えずそこへ上級生に連れられて逃げ込んだものでした。

学校で勉強した記憶は薄く、飛行機用の油と言って「ヒマ」を家で栽培して種採りをしたり、どんぐりを拾って1升も2升も持っていったものです。

食べ物は、女子と子供達で作った米や麦もほとんどが供出にとられ、麦の多く入ったご飯にさつま芋の葉っぱ入りの味噌汁を食べ、母の言うのには、1斗のお米を搗いてくると、母と5人の子供達で長い間食べられたくらいお米は価値の高いものであったそうです。

衣服は上から順々のおさがりと、継ぎの当たった服。それも買入れの時は、点数制で切符を持って買いに行っても品不足でなかなか手に入らず、母の着物をつぶして防空頭巾やモンペを作ったものです。

終戦を迎えて父が復員してきたものの、戦地での無理がたたって体をこわし、2年以上も寝込み、働き手は母と兄の2人だけ。“働けど働けどわが暮らし楽にならねど” 本当に言葉通り、毎日毎日苦しい生活をしたものでした。このような心身共に傷を受けるのも、もうゴメン、我々の子供や孫にはさせたくありません。

(以下省略)

1984. 2. 8

わたしの戦争体験から

K. T

私の戦中は、ひと言で言うなら飢えの時代であった。ロマンローランではないが、食べ物はもちろん、着るもの、履くもの、読むもの、書くものの他、魂まで飢えていたと思う。その上に、いつもいつも空襲の危機におびえていた。物資はすべて配給制、ほんのわずかの米を一升瓶にいれて棒で搗くのが子供の仕事でもあった。

田舎に親類のない我が家では、さつま芋の葉柄も佃煮にして主食代わりとなったぐらいで、いつもいつもひもじかった。白い米のごはんをおなかいっぱい食べる夢をよく見たものである。

私どもの時代は、小学校6年生で上級学校への進学入試と決まっていた。旧制女学校を目指して頑張っていた頃、戦争はもう末期に近かったので、都会から多くの子供達が転入学して来ており、教室は80名を超える生徒でごった返していた。一番後ろの列の子供は、いつも壁に背がくっついていたり、2～3列横の友達のところへ行くには、友達の椅子をまたがなければ通り道もないありさまだった。

しかし、夜の受験勉強はもっと大変だった。

家の外に室内の灯りがもれないように、窓には黒いカーボンのシャッターを下ろし、裸電球にはさらに黒布の袋をかぶせ、ちょうど長ちょうちんをぶら下げたような丸い灯りの下で、本を広げて勉強したのであった。ノートも鉛筆も極度に不自由していたので、3cmぐらいになった鉛筆でもきれいに削って、竹ばさみの先につけてなくなるのが常だった。

苦勞して、やっと入学した上級学校も、新入生以外はすべて学徒動員で工場に駆り出され、我々だけが新聞紙を折りたたんだような新教科書を使って勉強するありさまだった。習い終っても次の教科書が来ない時は、教室で傷病兵の白衣の繕いをした。

空襲のサイレンが鳴ると、観音寺町内の生徒は、すぐ家に帰してくれるようになった。これは、せめて死ぬ時は親といっしょに死なせてやりたいという配慮からであった。我々は、いつも死を目前に覚悟していた。今から思えば、それが本当の意味の死生観ではなかったかと思うけれど、幼いながらの覚悟のようなものがあつたと言える。

今の子供達と私の子供時代を比べようとは思わない。あの不幸な時代がもう一度あつてはならないが、不幸にあつた者だけが知る戦争の悲劇は、いつまでも語り残していきたい。少しばかり早く死を見すぎた私も、いよいよ自分の本当の死の刻を考えねばならない年令になりつつある。

1984. 3. 8

幼児の手を引いて

I. O

それは桜の花も散って、木々の新芽が色鮮やかな季節でした。暮れなずむ阿讃の山脈を見ながら遙か遠くへ思いをはせ、つぶやくように聞かせてくれた・・・それは悲しくも重たい体験でした。

「私がお嫁に行ったのは、昭和 17 年、あの戦争が始まったばかり、南方では日本軍の勝利の雄叫びが高々と上がっていた頃でした。当時、朝鮮の安洲という所で警察官をしていた人にすべての人生の夢と希望を託して嫁いで行ったものでした。1 年目に、夫も望み、私も願ったように男の子が生まれました。現地の人々にも大事にされ、それは、それは幸せな毎日でした。

昭和 20 年が明けて間もなく、私は 2 人目の子供の妊娠に気づきました。今度は女の子が欲しい。赤い可愛い洋服を着せてやりたいなど、夢を描いておりました。しかし、その頃すでに敗戦の色が濃くなっていたのです。ついに 8 月 15 日、天皇陛下の玉音放送を聞いたのです。日本が戦争に敗けたことを知りました。幸せだった生活が泡のように消えてしまいました。

頼りにする夫は、捕虜としてソ連に連行され、妊娠 8 ヶ月の身重の私は子供といっしょに収容所に入れられました。あんなに望んだ女の子が生まれたのも収容所の中でした。現地の人々の手の平を返したような冷たい目、配給される食糧はほんの少しで、幼い長男は『お母さん、おなかすいたよ!』と空腹を訴えるのです。かわいそうで、私は食べないで子供のお腹を満たしてやったものです。それでも十分ではありませんでした。収容所でのきびしい生活が 1 年続きました。持ち物は取り上げられ、食べるために乳飲み子を抱えて土方仕事もしました。

翌年の 9 月、私達はソ連兵の目を盗んで収容所を脱走しました。3 歳の坊やの手を引き、まだ誕生もこない長女を背に、人波にもまれながら、故国へ向かってきびしい引き揚げの旅を続けました。心無い人に靴を取られ、私も子供も裸足で 38 度線を越え、野宿をしながら何日も何日も歩き続けました。何も知らない長女は、私の出ない乳房にしゃぶりつき、泣き寝入りした夜が幾夜もありました。話せば本当に苦しく長い長い道程でした・・・」その人は淋しく微笑んで・・・

「すでにその頃、長男はもう 3 歳になってはいましたが、まだまだ動くといつも仲間の人達に遅れてばかりいました。それでも元気に私の手をしっかりと握って離れまいと必死でした・・・あの時のあの子の手の強さが、今も私の手の平に残っています・・・」とその人は節くれだった手を広げて見入るのでした。(私はその人の心の奥深く秘められている悲しい戦争の傷跡を見たような気がしました。)

「食べるものも十分に与えられず、芋づるやトウモロコシをかじっての生活、次第にやせ細っていく人々、そんなぎりぎりの生活の中でも、やさしい人がいてくれました。私達親子連れを励まし横から支えてくれた親切な人達・・・本当に神様のように思えました。人の心の温かさを噛みしめたのもこの頃でした。

私達は、仁川（じんせん）という所から船に乗り、台風に出会いながらも、どうにか生きて故国の土を踏むことができました。博多に着き、やっと履物（下駄）をもらいました。うれしかったですね。

原爆を受けたという広島町をみじめな思いで通りました。岡山駅の降りた時、浮浪者がいっぱいいました。疲れ切った3歳の坊やは、私の足元へへナヘナと倒れるようにうずくまってしまいました。あの時のあの子の顔・・・可哀そうで今でも忘れられません・・・」と、話しながらその人の頬に一筋、熱い熱い涙が糸を引いて流れました。

「やせ細ってミイラのように目ばかりギョロギョロし、栄養失調でお腹だけがぷくりとふくれた私達の姿を、今の人達は想像もできないでしょうね・・・」と、淋しく笑われました。

「やっと故郷の駅、本山に着いた時のうれしさ！生まれた家に着いたその日は、ちょうど村祭りの日でした。幽霊ではないかと泣いて喜んでくれた母さんの顔を見て、何も言えず、ただただ、ホロホロと涙がこぼれて止まりませんでした。戦後とはいえ、白いお米のご飯やおいしそうなお寿司を、『早くお食べ』と勧めてくれても無くなっては大変と思ったのか、『おいといて、おいといて』と、長男はなかなか食べようとしませんでした。芋づるやトウモロコシをかじってきた目に、そのご飯はなんと眩しかったことでしょう。本当に死の境をさまよいながらやっと帰って来られたのですよ。皆さんに助けられながら二人の子供を頼りにね・・・」

そして、その人はしんみりと言いました。「私の子供や孫には、もうあんな悲しい思いや苦しい体験は絶対にさせたくない。いえ、させてはならない。」と・・・それはそれは深く悲しい叫びにも思える言葉でした。

その後、ほんのり頬を染め「さあ、もう一仕事」と、立ち上がったその人の目じりに細いしわが刻まれてはいましたが、過去の苦しみを忘れたように爽やかな、いつもの親しみのある『精米所のおばさん』の顔でした。

1984. 5. 8

母から私へ そして・・・

T. T

戦争体験記と言っても、1歳5、6ヶ月の子供の頃では、記憶していることは何も無い。でも、実際に両親、祖母達と戦争の真ただ中で生きてきた。母や祖母に毎日のように聞かせてもらったお話・・・。

昭和19年～20年、所は大阪市此花区。空襲警報が鳴ると、夜は電気を消し、真っ暗。しばらくするとB29が飛んできて焼夷弾を撃つ。庭先や店の陳列棚のあたりに撃ち込まれた弾は、花火のように火花を出して燃え上がるので、すぐ家の外に投げ出したそう。分厚いガラス板も飴玉のように溶けていく。庭先に掘った防空壕には、食器を中心に入れてあったが、高温の弾が地面を焦がし、小皿など歪んで焦げ目がついている。これは、今でも使っているが、たくさんある中で2枚ほど目立つ。

たばこの仕入れは電車に乗り、用事を済ませての帰りに、空襲に遭うこともしばしば。電車が立ち往生して、乗客は急いで近くの防空壕に逃げ込むと、かぎの手の一方は満員で、入れそうにもない。もう一方は汚れているためか、すいていた。母に背負われ、そこに入り、しばらくするとB29の攻撃。赤ちゃんを抱いてオッパイを飲ませていた母子、その他の人々も弾が当たり、死んでしまったのはかぎの手の片方。誰もがきれいな所を好んで入った防空壕だった。母と私、そして他の数人は、糞便で汚れているのを辛抱して入った所で命拾いをしたそうだ。

父の勤めていた砲兵工廠^{※1}（ほうへいこうしょう）も空襲を受け、防空壕に入ったまま入口をふさがれ、3日間生き埋めになり、中から手で掘りやっとなってきて、見たのは死体の山々。家にたどり着くまで何遺体も踏んだとのこと。家にたどり着き、戸を叩くのに、祖母は本当に息子が生きて帰ってきたとは思えず、なかなか戸を開けずに「足があるか？」と大声を出してしまったそうだ。3日間仏前で祈り通していたので、この時の喜びは大変だったそうだ。

戦争中のことを話すと“人は笑う”と言うが、今でも母は時々話し出す。家財道具も焼き出され、観音寺に裸一貫で帰ってきたことを思うと、笑い話ではすまされない。

（以下省略）

1984. 7. 8

※1 工廠（こうしょう）・・・軍隊直属の軍需工場で、武器・弾薬をはじめとする軍需品を開発・製造・修理・貯蔵・支給するための施設。造兵廠とも呼ばれる。

小さな思い出

S. H

毎年7、8月になると、テレビや新聞等で戦争体験が報じられる。私が10歳の時、戦争が始まり、14歳の時、戦争は終わった。月日の経つのは早いもので、今年39回目の終戦記念日を迎えた。

我が家は、わずかはずれ、飛行場新設のための立ち退きを免れたが、地区の半分の人々は住み慣れた家や田畑を捨て移住していった。立ち退きの難を逃れ、ホッとしたもの、つかの間、毎日練習機の“赤トンボ”が上空を飛び、一歩家を出れば兵隊さんや義勇軍の集団に出会い、近くの神社の松の木の下には“赤トンボ”や軍事作業の機械が隠すように置かれ、社務所は兵隊さんの宿舎、まるで軍事基地の中に我が家があるような錯覚をおこすくらいだった。

戦争も終りに近いある日、はるか東の空に爆音が聞こえ、整然と編隊を組んで飛んでくる飛行機を力強く眺めていると、急に編隊をくずして急降下、超低空でバリバリと銃撃を始めた。滑走路を白い整備服の兵隊さんが走り回り、やがて飛行機が燃え、黒煙があたり一面を無気味に覆った。何が何だかわからないまま防空壕に入るゆとりもなく、隣の鶏舎に飛び込んだ。空襲警報の発令もなく、敵のグラマンの攻撃だった。その時の怖さは今もはっきりと覚えている。同じ部落のおじさんが足を撃たれたのも、この時だったと思う。そのおじさんは、その後、長い間戦争の大きな傷跡を背負い、大きく足を引きずりながらも強く生き、先年その生涯を終えられた。

この飛行場から神風特攻隊が飛び立つ噂が出始めたのも、この頃だった。休暇を、遠い故郷に帰れない兵隊さん達は、家庭気分を味わいに、よく民家へ分散遊びに来た。夫を、息子を、父を、兄を、弟を、出征させている家では身代わりのように思い、家族同然、温かく迎えていたようだ。女ばかりで男の子のいない私の母は、常に我が家から出征兵士を送り出せないことを肩身がせまく思っていたようで、特に大切に迎えていた。ある日、一人の婦人が尋ねてきた。長崎から来ていた予科練生のお母さんだった。大きいザクロの木の間から赤い夕日のさしこむ我が家の古い縁側で、母の出したかんころ餅（芋の茎や葉を粉にして作ったもの）に手も触れず、静かに語り合っていた母と子、何を話していたのだろうか。私の母はその姿に涙を止めどなく流していた。いつものように何も言わず笑顔で別れを告げた彼だったが、その日を最後に来なくなった。

終戦後しばらくして、両親から、あの折は大変世話になったと干しイカを添えて礼状が届いた。「若い血潮の予科練の、七つボタンは桜にいきり・・・」と歌われ、誰もが憧れた予科練の制服姿も凛々しかった彼、ひそかに乙女心をときめかせた彼は、お母さんの面接後、部隊転属となり特攻隊として出撃し、終戦を目前に若い命を捨てたのだ。

時折、こんな思い出話を交えながら、戦争の悲惨さ、今の平和のありがたさを、2人の子供に話したが、「へえー本当？」「観音寺でそんなことがあったん？うそみたい」とわかったような、わからないような・・・軽く聞き流されてしまう。戦争を知らない若い人達に話しても理解してもらえない心のモヤモヤ、いつかは時の流れとともに次第に淡く消えていくのだろうか。

しかし、今の平和は多くの尊い犠牲者の上にあることを私達は忘れてはならない。この犠牲を無にしないよう、そして、悲惨な戦争体験は私達が最後であって欲しいと強く、強く念じる。

1984. 9. 8

台湾からの引揚げ記

K. S

「ザザザー。」鉄製上陸用舟艇が砂浜に突っ込んで止まった。それは昭和 21 年 3 月 11 日の昼前だった。6 年ぶりの母国日本の鹿児島港の砂浜だ。一步降りた瞬間、やれやれ帰ってきたと実感が湧いた。

台湾彰化^{*2}からの第 1 回引揚げ船は駆逐艦「ハギ」で輸送された。弟の遺骨を持った私は、遺家族ということで、最初の組になった。一行は市内小学校に引率され、2 階の一教室に案内された。ござに座ると長かった不安な旅の気疲れがジワジワと出てくる。3 児も妻も、艦の高速と急造の棚作りの窮屈な部屋でトコトンへばってしまい、血より他に出るものがないところまで船酔いしたが、それでも子供ながらに頑張っているのが愛おしかった。でも、笑顔はない。何十人の同部屋の老若男女も緊張と不安の眼付きは皆一様である。どこへ帰るのか、どんな土地なのか、どんな人がいるのかと、在台 6 年で引揚げてくる私と違い、台湾生まれの内地を知らない多くの人々は、また、その不安が大きいはずである。途中で見た鹿児島市内は、空襲で見るとも無惨な焼野ケ原であった。焼け残った白壁の土蔵と枝のない幹だけの黒焦げの木がポツポツと広い瓦礫の町に散見する。ひどいことだったろう。生まれて初めて見る惨状に身震いを覚えた。

ここに 1 泊して、明日汽車で立つということで、班員の 10 数名分の夕食をもらいに炊事場のテントに行く。湯気もうもうの中で働いてくれている愛国婦人会のおばさん達に感謝して持ち帰ってみると、小麦の飯である。温かいものの、口の中でもじゃもじゃして喉にとおらない。土地を追われた日系人とはいえ、基隆港を出るまでずっと米飯ばかり食べてきた子供達はさすがに食べかねた。仕方なく、餞別にくれた豚の腸詰を思い出し、炊事場で焼いてきて少々ずつ食べさせる。空腹をこらえながらも故国に着いた安堵感に一夜の仮寝につく。

明くれば 3 月 12 日、いよいよ故郷に帰る汽車の旅。午後 3 時頃か、急造の狭い待合室は各地へ向かう人々の波で大混雑、荷物背中の老人が両手に孫の手を引いて踏みつぶされまいと必死の行列。私の足が何かを踏んだ。無理矢理にうつ伏して拾い上げてみると、台湾製の羊かんの包み、さし上げて訊ねても誰も見向きもしない。やっと乗り込んだスシ詰めめの汽車は、のろのろとそれでも一秒一秒と四国へ近づいて走ってくれた。空腹の子らも車の振動でか、寝入ってくれる。

「広島」と呼ぶ声に目をさます。そろそろ夜明けの様子。これは何とひどい焼野ケ原である。人影は一つもない。廃墟とはこのことか。原子爆弾という名のほかは何も知ってない被爆 8 か月後のありさまだ。何万何十万の遺体が瓦礫の下にあるかも知れない。この世の地獄である。たった一発のピカドンでこうも恐ろしい大破壊を一瞬のうちにやるようなものを誰がつくったのか。人の知恵の恐ろしさにおののくばかりである。

窓から買った『まんじゅう』というのが糠で作ったあんのない団子であった。誰も食べずに終わる。子供のリュックのおやつも、もう残りが無い。水筒の茶も切れた。同じことを何べんも言って辛抱させながら宇野から連絡船に乗る。

「いよいよ四国だぞ」「もう見えるぞ」と何回も言ったが、引揚げ船ほど速くは走ってくれなかった。

岡山の『きびだんご』も名ばかりで、腹の足しにはならなかった。一人千円の日本貨は一銭も減らしたくなかったが、高いばかりで役に立たない買い物ばかりを考えていると、今後の暮らしが一層不安になってくる。しかし、生命あつての物種。満州あたりの引揚者は見るに忍びない風采である。その点で私らはまだまだ幸せであった。

いよいよ最後だ、あれを出してやれ・・・と例の羊かんの包みを開いて少しずつ分けてやる。隣の初老のおじさんが子供の手元を食い入るように見るのを見て、妻が半分を差し上げた。おじさんは驚いて「もう何年も甘いものは食べとらんでの・・・、これは珍しいもんじゃ、家の者に分けてやりたい。ありがとうございます。」と何べんもお辞儀して押し載き、それから風呂敷包みから弁当を取り出した。白い大きなおにぎりが3つ入っている。「ボクらこれ、お食べな」と言って、その内の2個をくださった。

基隆港を出てから4日目の米つぶである。うまそうに食べる子供を見ている両親まで人の情に満腹した思いであった。

観音寺駅に着いたのは、14日の午前3時頃だったか。車中も親子5人の他に3人しか乗合せなかったが、待合室もガランとして、夏衣で帰ったわれら一家には、寒さがしんしんとこたえる。「台湾から帰られましたか、寒いでしょう。」と使用止めにしていたというダルマストーブに駅長さん自ら薪を入れて燃やしてくれた。「この雪の夜では、子供連れで困りましょう。こちらへ入って夜明けまでぬくもりな。」と事務室へ入れてくれた。やっと人心地ついて外を見ると、一面の銀世界。子供には生まれて初めての雪、寒いはずであった。

夜が明けた。雪もそろそろ溶けかけた。私の郷里、豊田には家もない。また、行く乗り物もない。一番近い柞田に母や兄がいる。疲労も空腹も忘れて、礼もそこそこに田舎道を走るように歩き出した。

1984. 12. 8

※2 台湾彰化（たいわんしょうか）・・・台湾中西部の県。県庁所在地は、彰化市。

学徒動員の朝に

N. T

学徒出陣・学徒動員・女子挺身隊となじみのない言葉ですが、私も短い間飛行機を造る工場に動員で行った経験があります。今考えてみると、何の知識も技術も持たない者が飛行機を造ったこととなります。尊い命がそんな兵器で失われたのではないかとも思われます。何の不審も抱かず、言われるままにジュラルミンを切ったり、曲げたり、鋸を打ったり・・・ほんの少し練習をしたように思います。現場に配置され、いくつかの班に分かれ、それぞれの部所で仕事をしましたが、私は尾翼らしい物を造る班だったと思います。造ると言っても、現場で言われるままに手伝いをしていたというのが本当の姿。昭和20年5月から8月15日まで・・・。

高松が空襲を受けてからは、機材の疎開に明け暮れました。明らかではありませんが、7月半ばからは工場も大麻山の中腹の松林の中へ疎開しました。汽車、電車を乗り継いで行きました。山にコンクリートの台を作り、工場らしきもの（露天）が少しできていた頃、重大放送があると言うので、山を下り、近くの民家へ玉音放送を聞きに行きました。はっきりと聞きとれない放送を聞き、その時は何が何だかわからないまま、みんなと一緒に涙を流した記憶があります。

毎朝、多度津駅のホームで鎖につながれて歩く米兵の捕虜を見ていましたが、8月15日の夕方には鎖はなくなっていました。本当に敗戦を感じたのはその時でした。それと同時に何とも言えぬ不安感を覚え、外人の横を小走りに通り抜け、下りの汽車に飛び乗ったことを思い出します。

戦争のきびしさを感じ始めたのは、小学校5、6年生の頃だったと思います、女学校の入試も「空襲の時ガラスが割れないように紙を貼りたいが、どんなのがよいか」と尋ねられました。入学した頃の勉強は、まだそんなに軍事色の濃いものではありませんでした。学年が進むにつれて、学校の中の様子が変わっていきました。運動場がさつま芋の畑になり、製粉工場が作られ、講堂は軍需工場と化していきました。学校の中にながら在校生とは別の世界にいて、先生方ともあまり顔を合わすことはなくなりました。ただ工場の担当者の指示のままに動いていたように思います。

寒くても暑くてもモンペをはき、防空頭巾、救急袋という姿で歩いて駅へ行き、ぎゅうぎゅう詰め汽車で丸亀の工場へ・・・。7月初めだったと思います。例のように姉と友達のY子さんと3人で駅へ向って歩いていた時、サイレンが無気味に響きました。警戒警報だと思って間もなく空襲警報のサイレンが聞こえました。人通りも少ない朝の道を3人は誰言うもなく急ぎ足になりました。後の方の空に何か黒いものが見え、爆音が聞こえたかと思うと、黒いものはみるみる大きくなり、私たちの方へ近づいて来るような気がして・・・その時は、一目散に走っていました。もうだめかと思った時、道端に植えられた数本のポプラの茂みが目に入り、無我夢中で木の下に駆け込みました。

その後、道路にパラパラ、パラパラと何かが飛び散り、砂がはねるのが見えました。グラマンの機銃掃射だったのです。いつも詫間の駅を通過するたびに、踏切のところにあつたポプラの木を見て、あの時の怖さを思い出しました。

もう何十年か前のことになりましたが、人の命がいろいろな形で奪われ、失われていったことを、子や孫や後輩たちに伝え、そんな危険、いや、もっともっと大きな危険が再び迫ってきていることを、一人一人の意識の中に持っていなければならないし、“戦争を考えてみる” ことの必要を感じています。

1985. 1. 8

二度と戦争のないように

E. G

終戦を迎えたのが小学校6年生の時、戦争の状況についてはわからなかったが、当時の生活の中で苦しかったことや、つらかったことだけが頭に残っている。

私の家では、父が造船関係の仕事をしていたのと、弟たちが小さかったので、戦争に送り出した経験はないが、父の甥たちが年老いた親と妹たちを残して出征したので、私の家族とあわせて11人。大家族をかかえ、食べるもの着るものもない時期に、父は必死になって働いた。姉や従姉たちは軍需工場で働き、私と幼い弟たちは空襲のサイレンが鳴るたびに目の見えない伯父の手を引いて防空壕に逃げ込んだ。伯父は防空壕の中で、出征した2人の我が子と家族の無事を願って、絶えずお経を唱えてくれた。夜になると、仕事で毎日帰ることのできない父の安否を気づかたり、家族が一日無事に過ごせたことを喜んだ。

戦争のため、竹やり、千人針、武運長久を願って神社参拝をするなど、いろいろな経験をした。戦後40年にもなると、私自身戦争の悲惨さを思い出すことは少ない。8月になると新聞で戦争体験記を読み、忘れかかった戦争中のことを、改めて思い出し思わず涙ぐむ。

年と共に戦争体験者も少なくなり、私達の職場でも戦争体験のないものが、ほとんどを占めていることから、時折戦争中の事を話し合ったりもするが、何不自由もない今の世代の人には、笑い話にしか受け止めてもらえないこともある。

今の子供達を見ても、テレビの影響を受け、遊びの中でピストルの撃ち合いや、ミサイル等、戦争に関した遊びが見られます。やったやられた等、やることやつぶすことがカッコいいと思う子供達が増えています。恐ろしい傾向になりつつある時代、そのためにも戦争体験者は、体験を語り伝えていかなければならない。21世紀を担う子供達が仲間を大切にす。どこの国の子供とでも仲良く遊べる。そして、おおらかに平和を愛する子供に育ててほしい。

私が保育所で教えた子供達も20歳を越え、戦争中であれば召集令状のくる年代の子供もたくさんいる。自分の子供も含め、教え子を戦場に送らないよう、反戦、平和を訴えていきたいと思う。

1984. 3. 8

食糧難の中で

K. T

8月15日の終戦の声を私が聞いたのは、川之江駅構内だった。

当日は運悪く、街中での延焼防止策として実施された強制疎開で家が壊され始め、引越先も荷物でゴッタ返していたので、13歳の私は9歳の妹と二人で徳島県の祖母の家へ行く途中だった。駅舎内いっぱいの群衆に囲まれてひととき目立つ軍服姿も凛々しい軍人が「終戦なんてありません。戦争は終わっていません。」「ラジオで放送しておった。負けたんだ。」「イヤ負けていません。」ワイワイガヤガヤと何が何だかわからないままに私は祖母の家へと急いだ。祖母宅は山間のひっそりとした所にあり、静けさに包まれた中で祖母ひとりせつせと畑仕事をしていた。

夏休みも終り近くなり、また妹を連れて観音寺へ帰って来たが、壊されかけたままの私の家はそのまま放置され、終戦は間違いなかったが、私は子供のことでピンとこなくて、なんとなく過ごしたように記憶する。しかし、食べ物だけは確実に不足しており、特に米などは配給制で、今のようにどこでも自由には買えなかった。米穀通帳なしでは、一粒の米も麦も手に入らず、また通帳で買える量もほんのわずかだったので、近在の農家へ買い出しに行ったりもしたが、警察に見つかればすべて没収、あるいは連行されるという厳しい食糧事情だった。また、配給されるのは、米、麦でなく、米の代わりに砂糖（キューバのザラメ）だったりしたが、そんな時は、毎日毎日カルメラを作って食べていたことを思い出す。時には、さつま芋も配給され、大水害にあった年の芋などはゴリ芋で、今なら家畜の餌にもならないような芋を蒸かしてガリガリする芋も辛抱して食べていた。芋の配給が何日も続き、明けても暮れてもさつま芋を蒸かして食事代わりに食べていたが、今の子供達には想像もつかないだろう。

いつもひもじい思いで、お腹いっぱい食べたいという思いは、今はもう思い出したくもないが、この子供時代の体験は強烈で、いまだに私自身の生活信条の一つになっていて、自分の子供達には着るものがなくても、家がなくても、ひもじい思いだけは絶対させないという思いになってしまっている。

おかげで子供達はずいぶん大きく成長したが、これも平和のおかげと、本当にこの平和が、この先もずっと続くことを心から願わずにはいられない。

我が子が戦争にかり出されることは想像しても胸がキュッと痛くなる思いだ。男性の中には、闘争本能云々を高言する人もいるだろうが、そういった闘争本能は、どうか平和存続のための努力へと向けて欲しいものです。戦争は絶対いやだ！

1985. 6. 8

尊い生命を奪う戦争について思うこと

Y. T

「戦争中悲しかった事は？」と聞くと「つらい事が多すぎて何から話してよいやら！」と言いながら、母が語ってくれた一つの経験は……。

ふと事故で祖父は首筋の血管を切り、大量の出血をした。それ以後、蒼白い顔をして体がだるい、足がだるいと言う祖父に、十分栄養のあるものを食べてもらう事も出来ずに、一年余りで亡くなってしまった事が心残りだと言う。

当時、戦時下とはいえ、お医者さんの証明をもらって卵を分けてもらったり、日用雑貨、衣類をはじめお魚まで配給制であったらしい。そのようにしてやっと手に入れた食べ物、祖父は初めての出産を控えていた母に無理に食べさせ、自分はなかなか食べようとしなかったらしい。さらに、家は農家であったが、ほとんどの田畑を飛行場に提供したため、残ったのは一カ所だけで、農家でありながらお米まで配給を受けていたようである。お米が余れば、欲しい物と交換してもらうことも出来たらしいが、それもままならず、だんだんと弱っていく祖父を見るのがとてもつらかったと、母は声を詰まらせる。

しかし、母にとってせめてもの慰めは、祖父が枕元で、羽織の裏の肩ぬきで産衣を縫っている母を満足げに眺め、仕上った小さな着物をなでながら、とても喜んだこと。また、食糧事情の悪い中で、自分を犠牲にして食べさせ、育児書を何冊も読んで母に注意を与えた甲斐があつてか、五体満足な初孫（私）の誕生を見、抱いたり負ったり、あやしたりして新しい生命を愛おしんだ後、亡くなったことだという。祖父にとって、親代わりに氣遣ってきた甥を戦争で亡くしたばかりだったので、その喜びは、ひとしおだったらしい。

このように、どんな状況にあらうと、生命の誕生ほど人を力づけ喜びを与えるものはなく、その死ほど人を悲しませ落胆させるものはないと私は思う。それを、いとも簡単に、一時にたくさん戦争は奪ってきた。祖父のように戦争の間接的な影響で亡くなった人は、さらに多いに違いない。しかし現在、人間が頭脳を結集して開発した核の威力は、ある国の核だけで地球上の人類を12回も皆殺しに出来るそうである。生命の尊さを知っている人間が、なぜこうしたことに時間とお金を用いるのだろう。突きつめて考えると、それは、人の、国の利己心に他ならない。

私達は一人ひとりとえられた心や頭脳を、もっと有益なことに、もっと人を愛することに役立てるべきだと強く思う。子供達にも本当の自己犠牲的な愛を教え、家族の中で、友人達の中で実行し、小さな争いもないようにしなければならないとも思う。

1985. 8. 8

ヒロシマを訪れて

M. W

広島への到着を告げる『こだま』のアナウンスを聞きながら、車窓から左右の景色を眺めると、初めての広島なのに山脈になぜか見覚えがあります。原爆投下後の廃墟と化した『ヒロシマ』の数枚の写真の中で見たあの山脈です。今は立派な建物が立並んでいますが、これは確かにあの『ヒロシマ』だとの実感がジーンと胸に湧き、思わず衿を正しました。

観光バスで平和公園に着き、下車すると無残な姿の原爆ドームが目に飛び込んできます。ガイドさんの声が遠のき、川の中から、整地された公園のあたり一面から「あついよー、あついよー」「みず！みず！」と悲痛な声が無数に聞こえてくるように思われました。

原爆資料館の写真、展示物の一つひとつが、原爆の熱線、爆風のすさまじさを、放射線の怖さをつきつけてきます。胸が痛くなり、こんなことが許されてよいものかと、怒りがこみ上げてきました。

しかし、原爆投下後 40 年の今日、核兵器は増え続け、現在では、この地球上に 4 万～5 万の核弾頭が存在し、その爆発力は広島原爆の 100 万倍～150 万倍で、地球上の人類 47 億人を 5.60 回も皆殺しにするほどのものだそうです。

(一部省略)

“安らかに眠って下さい

過ちは繰り返しませぬから”

と刻まれた原爆慰霊碑の言葉にそむかないように、核廃絶に向けて、自分のできるところから一步を踏み出さなくてはと痛感しました。そしてこれからは、真実を見抜く力を身につけ、真の平和な時代を築くために、がんばらなくてはと決意を新たにしました。

1985. 11. 8

戦時下に芽生えた“心”

K. M

『戦争体験記』と言えば、年がわかるのであまり書きたくないが、戦後40年が来た今も昨日、今日のようにあちらにもこちらにも、なまなましい苦しみが残っています。だから二度と戦争をするようなことはしたくありません。私自身身をもって体験したというのではない。でも毎日、教科書を入れたかばんの他に、防空頭巾、救急袋を小さい肩にかけて、いつ敵機が来るかわからないと、ビクビクしながら通学したことを覚えている。そして学校に行くと、毎日のように避難訓練をした。勉強はほとんどと言ってよいくらいしなかったように思う。

農繁期が来ると、男の人が戦争にとられて居ないので、近隣が集まって手伝い合いをする。炊事も共同です。都会の女学生が農家へ集団で来て、炊事をしたり、小さい子供を見たり、小学生の勉強を見たりしていた。中学生(旧制中学)の兄さんたちは、野良仕事、力仕事をしていて。その中学生が夕方帰るとき弁当箱に、お百姓さんのおひつのおいご飯を家族のお土産にといっぱい詰めて帰っていたのが、小さかった私の心にどうしてか残っている。

戦争中はよく近隣が助け合い、子供同士も親から言われた仕事を、お互いに手伝い合って、どんなこともやり遂げた。そんな遊び仲間は今も忘れない。今の子供には考えられないことである。

だんだん戦争が悪化し、食糧難の波が押し寄せてきて、農家は米麦を作りながらも戦争にとられ、食べることができなくなった。秋の米の取入れどきに、稲のハデの穂を一夜の中に、すごき盗られたり、芋を盗られたりということがよく聞かれるようになった。私は、小さいながらも何か悲しく、わびしい思いをしたのを覚えている。

学校でも、川原や山を開墾して芋作りをしていた。食べるため根空腹を満たすために必死の思いで芋作りをした。石ころの川原、急斜面の山、どちらも大変な労働であった。でも、空腹を満たすため、どの子供も力の限り頑張った。今の子供は体験学習とか、土とともにと言って花作り、芋作りをしているが、戦争中は生きるためにと本当に必死で作った。このような作業の中で、上級生は下級生を助け、下級生は自分の力でできることを力の限り出して頑張った。そのような関わりの中で、人間としての心の温かさを学んだような気がする。そして、誰もが自分の身を惜しむことなしに陰日向なく、その時、その時を力いっぱい働いた。

戦争中は物がなく、生活は厳しかったが、みんなの心が一つになって、相手の心を思いやり、助けたり助けられたりという、人の心の素晴らしいものがどこにも見られたように思う。

今は、戦争の怖さを忘れ、ものの豊かさとともに、自分さえよければ他人のことなどどうでもよいという人が、多くなってきているのではないだろうか。また、人の嫌がる仕事を自分から進んでする人が少なくなり、利害関係が動くことが普通のようになっている。こんなことが平気になると、また戦争が起きるような気がする。尊い命を捧げられた戦争犠牲者の方々に喜んでもらえる世の中をつくるべきだと考える。戦争は怖く辛

かったが、温かく、優しく、思いやる人の心はあったような気がする。その素晴らしい人の心は、いつの世にも大事に大事にしていきたいと思う。これこそ私たちの願う平和の柱のような気がする。

飽食の時代に生きて飢餓を思う

K. T

食事時に食べ残す子供達と、それに対して何も言わぬ若い親達。食べ物に好き嫌いの多い子供とそれを気に留めぬ親達。見ているいろいろ考えさせられることが多い今日である。私には、飢餓に対する直接の体験はないのだけれども、それでも極端に物資の不足した戦後の一時期の余波を受けたおぼろげな記憶は残っている。

食物に乏しく粗末で、入手できるものと言え、現代の子供達には見向きもされないような品々、材料であった。

外地から引揚げてくるであろう父母を待って、主食のコメの食い延ばし作戦を立てたのである。汁気ばかりの粉団子汁、さつま芋の葉入りの雑炊、かぼちゃ7割、米麦3割のご飯等々で、およそ食べられるものは美味、不美味いを言っではいられなかったのである。満腹感が味わえれば、それで最高であった。

衣類にしても、つぎはぎの衣服を着、仕立て直しのスカートをはかされ、およそ新品と呼べる衣類は皆無に近い幼少期を過ごした。皆無といっても極めてたまに新調を許される衣服類は、だぶだぶの物であって、例外なく袖とか上着、ズボン、スカートの裾は折り返して補修されており(成長に伴ってのばし長い期間着用できるように)そのため不格好で、ピッタリ身に合ったものなどは、おそらくあてがわれることはなかった。

現代のように汚れば焼き捨て、破れれば廃品にと処理できる時代ではなかった。豊かなことは良いことではあるが、衣食住足りることは幸せなことである。しかし、その豊かさにとすれば、あの苦しかった生活が忘れがちになり、物のありがたさ、人と力を合わせ助け合うという心掛けが、少なくなっているのではなからうか。戦争の犠牲者の意を無駄にしないよう、再び戦争を繰り返さないよう、平和への願いを込めて皆で立ち上がろうではありませんか。

1986. 1.8

空襲

T. K

戦局が次第に不利になり、毎晩のようにB29が我が本土に飛来してきた。その夜も12時頃であつたらうか、警戒警報が発令された。宵からあらかじめ準備をしていたものの、こう毎晩では睡眠不足である。父は子供達を起こして、防空頭巾、リュックサックと慣れたものである。母の「早く早く」という声、近所の子供の泣く声と……準備が整うと避難である。中洲周辺は上市墓地である。現場に着く頃、空襲警報が発令である。橋を渡って多くの人々が避難場所に行っている。多くの人々が墓地にいる間もなく、B29の大群が独特の爆音を響かせ飛来した。「子供を泣かすな。静かにせよ。」「マッチをつけるな、飛行機から見える！」等、暗闇の中での恐怖の時間がしばらく続く。あれは尾燈だろうか、赤い灯が点滅している。B29が西の空に続く……B29が通過しても空襲警報は解除されない。

しばらくすると、西の方向が夜空の中に真っ赤に染まってきた。誰かの「伊吹島が燃えているぞ」という声。あまりにも近く感じたからだろうが、それが今治だと分かったのは何日も後からであった。

空襲はB29のみではない。ある日、私は学徒動員と称して、現在の黒淵・本大線の道路建設に駆り出された。トロッコに土砂を積んで、川原からレールの上を、今の警察署付近まで数往復するのが仕事である。その日の昼頃である。突然、グラマンが低空で飛来した。ダダダダッと機銃掃射である。飛行場が完成しつつあったので来たのだろうが、あわてて草むらの中へ飛び込んだ。飛行場と言っても機体は見えない。赤トンボ(練習機)が見えるだけである。やがて高射砲のまわりに2～3名が取り囲んだが、グラマンは遙か彼方である。目を北面に向けると高屋の山に見え隠れして急降下する機体を見つけた。詫間海軍航空隊の爆撃であろうか、10数キロ離れていても、爆音、機関銃の音がけたたましく聞こえる。

昭和ひとケタの世代の方は、これらの空襲体験をもっていると思います。我々はこれが戦争の一部くらいにしか思っていなかった。学業を放置してトロッコでの土砂運び、これが当たり前のことと思っていた。いや思い込まされていた。敗戦の日もトロッコを押していた。

先生の「戦いはこれからだ。」この一言が空しく今でも思い出される。

1986. 2.8

幼き日を思う

K. O

終戦後はや40年が過ぎ去り、戦後生まれの人が、人口の半分以上を占めるようになり、また戦争経験者でも、その記憶が年とともに薄れて、人々の脳裏から戦争が忘れ去られようとしています。今一度、乏しいながらも戦争中のことを思い起こし、戦争を知らない人たちに少しでも知っていただき、二度とあのような忌まわしい戦争が起きないように、平和な世がいつまでも続くようにしたいものだと思います。

私が、小学校(当時は国民学校と言っていた。)に入学したのは、太平洋戦争が始まった翌年でした。戦争を本当に身近に感じだしたのは、昭和19年頃からで若い人だけでなく、一家の大黒柱までもが兵隊に行くようになった。隣近所一つの部落内でも元気な大人の男子は、みんな兵隊にとられ、女と老人子供しか残っていなかった。

また、昭和19年の終わり頃からは、B29が白い飛行雲の尾を引いて上空を飛ぶようになり、空襲警報のサイレンが鳴る日が多くなりました。空襲警報になると、朝の1時間目であっても直ちに集団下校となり、こんな田舎でも落ち着いた授業ができませんでした。下校の途中で上空にB29が飛来すると、川の中や麦畑の溝に身を伏せて、飛び去るのを待ったものです。学校へはいつも防空頭巾を持参しており、これをかぶって伏せます。また、負傷した時などのために服、持ち物すべてに学校名と名前を書き、どこの誰であるかすぐ分かるようにしていました。

昭和20年の夏頃になると、戦闘機であるグラマンが飛んでくるようになり、詫間の航空隊と観音寺(柞田)の飛行場を、七宝山を中心にして、円を描くように交互に飛んできては機銃掃射の攻撃をしてくるようになりました。飛行機が飛んで来たかと思うと急降下をして、所構わず「バリバリ」と攻撃をして詫間方面に飛び去り、また、海の方から飛んで来ては「バリバリ」と攻撃を繰り返して飛び去ります。私はこの様子を小高い丘の堤の上で、何事かとあつけにとられて見ていたことを今でも鮮明に思い出します。恐ろしさをおり越し、ただ、びっくりして見とれていたように思います。

後で聞いた話ですが、飛行場で働いていた人何人かが弾にあたり負傷したそうです。グラマンが飛んできて機銃で攻撃してくる様子は、映画で見るのと同じです。今考えると本当に恐ろしいことだと思います。

鹿隈の山林(現在、花崗土を取っているところ)の中には、観音寺の航空隊の兵舎が沢山建っており、ここの兵隊さんの中からも特攻兵として、出撃していった将校の方が多くいたようです。

各家庭では、庭のすみに防空壕を掘り、空襲警報になると防空頭巾をかぶり、この中に避難しました。夜は灯火管制と言って電灯の周りを黒い布で覆い、明かりが屋外に漏れないようにしなければならず、大変不便な思いをしました。

また、鉄砲の弾を作るためと言って家にある金属類(窓、杵、鍋、釜など)はすべて供出し、土で作った鍋や釜でご飯を炊いていました。

その他、学校の運動場は芋畑に変わり、教室の一部が兵舎になって、兵隊さんが寝泊まりするなど、現在では想像もできないような状況でした。また、女の方は、国防婦人会を結成し、真剣に竹ヤリの訓練を受けました。戦争が激しくなってくると、戦死した兵隊さんの遺骨が帰ってくる数が増え、これをお迎えするのも学校行事の一つになっていました。親、兄弟、子供が戦争に取られ、戦死された方が沢山います。

人の命を奪い。村や田を破壊し、沢山の物資を消耗する戦争、自分の子や孫には体験させないようにしたいものだと思います。

1986. 3.8

母の戦争体験談より

K. G

思い出ただけでもあの嫌な戦争！思い起こせば、月日の流れは早いもの。子供心に忘れもしない昭和16年の12月8日、父母や祖父母達に戦争が始まったのだと聞かされたが、まだ幼かった私にはあまりピンとこなかった。そして、それ以来、だんだんと戦火は厳しくなるばかりで、国民の生活は苦しくなる一方で、人手は国家のために1人でも多くとられ、老人や子供、婦人が後に残り、貧しい生活をする。

食糧難で物資は不足し、とても今の生活から見れば想像もつかないような地獄でした。それでも田舎生まれの私は良い方で、麦ごはんでもお腹いっぱい食べられていた。こんな事、今だから言えるが、作ったお米だって供出、供出と言って一粒でも多く国に出すようにと言って出さされていた。父母達は苦勞して10人以上の大家族の食糧を囲うために地下室に隠したり、庭蔵に入れたりして出荷をしていたようだった。衣料品でも食料品でも今のように良いものはありません。代用品の悪いものばかり、それも制限されて配給されて、くじ引きで当たったら貰えるありさまだった。

衣料品から魚、砂糖、塩、買うに買えず、品がなかったのだから仕方ない。ノートだって糸でつづって自分で作ったものだ。

学校の運動場にサツマ芋を作って、毎日、学校へ唐鍬や鎌を持って登校したり、出征家族に勤勞奉仕に行つて小学生が百姓の手伝いをしていた。それもまだ田舎だったのが幸せだったのか、あまり恐ろしい体験もなく終戦になった。

都会では、私なんか想像もつかないようでした。あの恐ろしい原子爆弾を發明した国なんか相手に戦争では、小さい日本などとてもかなうはずがない。広島・長崎原爆資料館など見学すると、とてもむごたらしい。あのような事はこの地球上に二度と起こらないでほしいものだ。

私も父と伯父2人を戦地にとられて淋しい毎日だった。出征する時、村の人達に送り出されて、母を初め大人達が泣いていたのが今に頭の奥に残っている。

終戦の昭和20年8月15日に友達と2人で、汽車で財田駅から坂出の方までお醤油を1升位買いに行つていて、天皇陛下のお言葉をラジオで聞いた思い出があります。

書き連ねていけばきりがなく山ほどありますが、何が何でも戦争なんか絶対に嫌です。世界が平和であることが何よりの願いです。

以上が私の母の雑感と体験記です。

1986. 5.8

母の痛みを

Y. M

「おっちゃんのお墓に、もう一回水をあげよう。」我が家の墓参りには、夫の長兄の墓に、たつぷりと何度も水をあげることが習わしになっている。

戦争がいよいよ激しくなった昭和19年7月2日、この兄はビルマにおいて戦病死したのである。22歳であった。84歳の姑は、兄の戦死の公報を手にした時のことを、昨日のこのように、何度か私達に話して聞かせてくれた。

当時は日本中の母が“軍国の母”たることを褒め称えられていたが、それに加えて姑は人一倍気丈な人で、役場から戦死の公報を手渡された時も

「戦病死などということ、お国のために役立てず申し訳ありません。」とあいさつしたのだという。

姑は、その前夜、兄が戻って来て黙ってニコニコ笑いながら座っていて、戦地へ帰るよういくら勧めても動かなかった夢を見て（もしや…）という胸騒ぎがしたそう。だから役場の方が坂を上がって来た時に、もう（ああ、とうとう来たな。）と思ったという。

それにしても涙一つ見せず、声も変えずに対応した姑の胸の中を思う時、計って余りある気持ちでいっぱいになるのである。役場の方の後ろ姿が見えなくなった時、大声をあげて泣いたと姑は話す。

暑いビルマの地で、病といえば、たぶんマラリアだったのだろう。同じ町内の人2～3名がたまたま兄の様子を知っていて、手厚い看護を受けたと伝えてくれたことが、姑にとって、せめてもの救いであつたらう。

今、我が子も兄の年齢に近づき、私は当時の姑の年を越えてしまった。

私達の愛する子供達を、戦争に駆り出してはならない。もう決して、母の痛みを繰り返してはならない。

再び戦争・・・それは、今度こそあらゆるものが滅びることにつながるのだ。

『国の冬 思いふけりつつ 夕涼み』

兄の墓標に刻まれた句に、どんなに飲みたかっただろう故郷の水を、何度もかけながら、私は思う。

1986. 6.8

母の戦争体験記より

M. Y

戦争の話のテレビなど見たくない。思い出したくないと言う母に、戦争体験記を書いてももらいました。「書きたくないけど、もう年だし、話しする父さんもいなくなったし、今書いとかなくちゃあね。」と老眼鏡をかけながら……………。

『日支事変は女学校3年の夏、昭和12年7月7日、それから、女性がラクして、おしゃれをできるような世の中ではなく「欲しがりません勝つまでは、国民皆兵」で「母さんには、青春時代はなかったな。」と娘と話したことがありました。

昭和17年、軍服を着た、いかにも強健そうな主人と見合い結婚し、1年間は1人留守番。翌18年、主人のいる満洲へ日本刀を背に勇ましく出発し、雪降る国境の町アルシャン（ノモンハン事件のあった所）へ着きました。夜は狼の声の聞こえる怖い所でしたが、楽しい新婚生活。その生活も9カ月足らずで、ただ「南方へ」とだけで主人は出発し、私は一人で4カ月のおなかを抱えて内地へ帰って来ました。もし、あちらで終戦を迎えていたら、長男は中国戦災孤児になっていたかも知れないと思います。

昭和20年の1月、空襲警報発令中に長男誕生。

主人からは、沖縄宮古島消印の葉書が一枚きりでした。その頃、日本は県庁所在地を中心に焼土と化して、ついに8月、広島と長崎、あの原爆投下。あのような事がなければ終戦にならなかったのかと、あれがなければ、まだ戦争は続いていたのかしら？と思います。

終戦後、20年の12月主人は復員して来ました。満州で10年もの長い年月、穴熊のような生活に体を悪くしたのか、以来健丈な生活はできませんでした。しかし、従兄のように戦死せず、無事帰ってきてくれただけでも喜ばねばなりません。しかし、その主人も3度目の発病で、ついに昨年5月22日帰らぬ人となりました……………』この続き、母は書いたものを破ってありました。

きっと戦争さえなかったら、もっと長生きして、一緒に暮らせただろう、優しかった父のことを思い出したことと思います。私は戦争を知らない世代です。私達は将来戦争で泣く妻、子供達をつくらないように、平和を守っていかなければならないと思います。

1986. 7.8